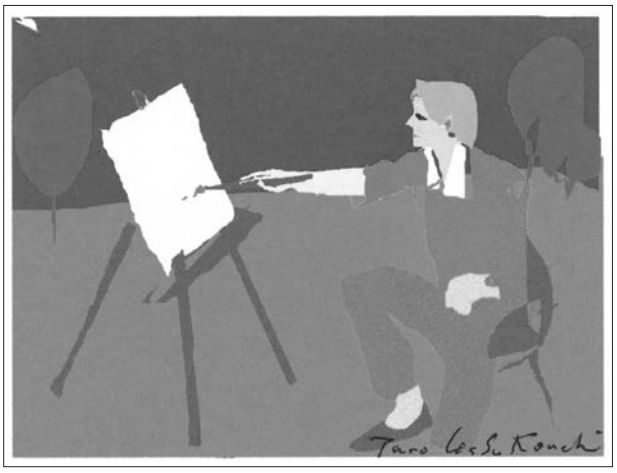
創造性のある絵画を目指して

札幌市医師会
札幌立花病院
安河内太郎

常々、ドビュッシーやショパンの音楽に浸り、印象派の絵画に囲まれた生活に憧れていましたから、48歳（母は48歳で死去）の時、ピアノを弾くことと油絵を描くことにしました。しかし、ピアノは毎日練習しなければならないので、無理だなあと思い、１年ほどで辞めました。当時、北大第二内科の助教授で、後に東大第４内科の教授になられた堀内淑彦先生に、どうして絵を描くのかと聞かれ、「（創造性豊かな）プロ（芸術家）になりたいから」と答えました（その後プロは必ずしも芸術家ではないと思うようになりました）が、本当はお金も無いし、高価な絵は飾れないので、仕方ないから、自分で絵を描こうと思ったのが真相です。堀内先生は天才的な研究者でしたので、一流にならなければ許してくれないだろうと思っていましたから、いい加減なことは言えなかったのです。親父は「医学の勉強だけしていれば良いのだ、何をやっているのか」と大変怒って叱られましたが、後に、診療室にあった棟方志功の絵を外して、僕の絵を飾ってくれました。

しかし、絵を描き始めて50点ぐらいまでは人に見せられるような絵は描けませんでした。家内はいつも「何が描きたいの？」と馬鹿にしていました。どうしたら良いのか聞いても、自分で考えなさいと突き放されました。何が悪いのか？　自問自答の日々でした。

絵を描き始めて９年目、札幌市の狸小路にある松山額縁店の社長に薦められて、個展をすることにしました。来客数は約600名、展示した40点は全て売れましたし、追加注文６点で、46点売れました。家内が作った１本３万円もするネクタイが30点全て売れました。お花30点、祝い金や菓子なども30点頂きました。しかし、この事件は私の芸術性に深刻な疑問を投げ掛けました。誰にでも受け入れられるということは、ミーちゃんハーちゃんの世界だと思ったからです。有名な芸術家の絵はなかなか受け入れられなかったし、数％の支持を得られれば良いくらいのものです。何とかしなければ、芸術家にはなれない。

とにかく、絵を変えなければと思いました。だから、それまで線画的で、セピア色を多用して心の内面や動きを表現できたらと思って絵を描いてきましたが、師と仰ぐ、優れた芸術家の札幌美術学園の園長・笠井進先生（平成25年７月21日逝去）に「線画を描く人は、息詰まって長生きしないよ」と言われましたし、「絵が暗いよ」と言う人もいました。元々、家に飾って楽しくなるような絵を描きたいと思っていましたから、忠告にしたがって、個展が終わってから、明るい色を使って、線画ではなく、面画を志すように努めています。それからの10年間、たまには気に入った作品ができましたが、その割合が大変低く、低迷していました。やっと、ここ12～３年くらい前から、少しは観られる作品の割合が段々増えてきたように思います。８年前に他界した家内も褒めてくれるようになりましたが、今でも、アトリエには上手く描けないで放置されたままの未完成な絵がたくさんあります。

絵を始めて２～３年後、札幌市医師会美術クラブに入会させていただきました。会では、年に１回の展覧会を催しますが、今年は第50回札幌市医師会美術クラブ展ということになります。平成13年以降の札幌市医師会美術クラブの変遷（完結編）が札医通信に掲載されることになっていますので、ご笑覧いただければ幸甚に存じます。